

< 2020年1月 >

古賀 順子

「マイヨル美術館
『ナイーブ派の巨匠たち、税関吏アンリ・ルソー
からセラフィヌまで』展」

昨年12月5日から始まった「年金改正法反対」ストライキは40日を過ぎた今も続いている。パリの交通機関が機能せず、行動半径が制限され、予定は押され、物事がなかなか先に進まない。1月中旬になり、政府は年金受給資格年齢を64歳に引き上げることを保留し、交通機関はようやく正常に戻りつつある。私もこれまでの遅れを取り戻すべく、まずはマイヨル美術館の展覧会『ナイーブ(素朴)派の巨匠たち』を見に行った。

マイヨル美術館は名前の通り彫刻家アリスティッド・マイヨル(1861-1944)の作品を中心に、20世紀前半の芸術家たちの作品を収めた私立美術館である。マイヨルのミューズとして15歳からモデルを務め、彫刻家の作品と財産を相続したディナ・ヴィエルニー(1919-2009)が1995年美術館を開館する。ギャラリーを開き、ナイーブ派の画家たちを経済的に支援し、作品を収集したディナ・ヴィエルニーが亡くなって10年。彼女が援助した画家たちの作品約100点が展示されている。

ナイーブ派の作品はフランスでも紹介される機会が少ない。20世紀前半、とくに1937年パリ万博を機に注目される画家たちで、税関吏アンリ・ルソー(1844-1910)、カミーユ・ボンボワ(1883-1970)、アンドレ・ボーシャン(1873-1958)、ジャン・エーヴ(1900-1968)、フェルディナン・デスノス(1901-1958)、ドミニク・ペロネ(1872-1943)、ルネ・ランベール(1896-1991)、ルイ・ヴィヴァン(1861-1936)らである。彼らの共通点は、戦争に動員されたり、職業を転々としたり、経済的な理由でアカデミックな美術教育を受けずに独学で絵を描き、いわゆるバランスの取れた構図ではなくアンバランスな人物や風景が特徴的で、原色に近い鮮やかな色彩を好み、肖像画、静物画を主に、現実から喚起された画家独特の世界を描いていること、

そしてディナ・ヴィエルニー、ヴィルヘルム・ウーデ(1874-1947)、アメデ・オザンファン(1886-1966)、ジャンヌ・ビュシェ(1872-1946)など、美術収集家たちの経済的な援助が絵画活動を支えたことなどを挙げることができる。その中でも特異な存在が女性画家セラフィヌ・ルイ(またはセラフィヌ・ド・サンリス)(1864-1942)である。貧しい家庭に生まれ、両親を早くに亡くし、パリで女中として働き、サンリス(パリ近郊オワーズ県)の修道院で働きながら絵を描く。貧しさの中で描いていた静物画がドイツ人美術評論家でコレクターのヴィルヘルム・ウーデの目に止まる。ウーデの励ましと経済的支援によりセラフィヌは独特の宇宙観を描き続ける。ブドウやミモザなどの静物画から溢れ出るエネルギーと鮮やかな光は、烈しい命の発熱を感じるようである。伝統的な静物画と異なり、直接魂に訴える強さを有している。第二次世界大戦勃発後、ウーデの援助は途絶え、精神を病み画家としての活動が続けられず、精神病棟で貧困と飢えでこの世を去るセラフィヌ。残された作品に彼女の命が燃え続けている思いがする。

ナイーブ派の巨匠たちが描く現実には、「素朴さ」からは遙かに遠く、幻想的とも言える世界観を感じる。ナイーブ派で最も有名な税関吏アンリ・ルソーも税関の仕事の本業に、独学で絵を描いた。パリ5区にある「動植物園(ジャルダン・デ・プラント)」の熱帯植物に喚起される巨大な植物やライオンやヒョウからは、自然界のざわめきが聞こえて来るようだ。フランドル絵画に傾倒したルネ・ランベールの街角や建物からは、騒音は消され、静寂そのものである。花の種や苗を育てる造園を本業としていたアンドレ・ボージャンの巨大な花束と鮮やかな色どりは圧倒的なエネルギーを発している。展覧会ポスターになっているカミーユ・ボンボワ『人形を持った少女』(1925)のように、ボンボワが描く娘たちはアンバランスで、押し潰されそうに大きく、現実的とは形容し難いが、思春期の娘たちの力強い存在感に満ちている。

日本ではなかなか見る機会が少ないナイーブ派の画家たち、展覧会は来月2月23日まで延長して開催されることになった。期間中パリに来られる方には是非見ていただきたい展覧会である。